世界名作劇場

小公女（プリンセス）セーラ

『ベッキーの里帰り』

第 29 話

提供　ハウス食品工業

制作　日本アニメーション
　　　フ　ジ　テ　レ　ビ

脚本　中西隆三

登場キャラクター（第二九話「ベッキーの里帰り」）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ベッキー
ピーター
お菓子屋の主人
××××
ベッキーの母
ベッキーの弟
ベッキーの妹

ベッキーの父

エミリー（人形）

シーザー（猫）

メルの一家（ネズミ）

1

ロンドンの屋根屋根

ロンドンの屋根屋根朝日がさし、教会の鐘の音が鳴り渡っている。

セーラの声がかぶる――

セーラの声「今日から夏休み……」

2

ミンチン女学院・屋根裏部屋

天窓から、街を眺めているセーラ――

セーラ「アーメンガードやロッティたちも、もう自分のお家へ帰っている頃だわ」

――飛び立つ雀たちの群れ。

セーラ「そうだわ……今日から、ベッキーも里帰りをするんだったわ……」

セーラ、台にした椅子テーブルを降りると、ドアへ行く

——

3 同・ドア外

部屋から出て来たセーラ、隣りのベッキーの部屋のドア
へ行くとノックする。

セーラ「お早う、ベッキー……支度はできて?」

ベッキーの声「はあい、ただいま……」

4 同・ベッキーの部屋

ドアが開き、覗いたセーラ、驚く。

割れ鏡の前で、かぶった夏帽子を直しているよそ行き姿

（来た時の服）のベッキー。

セーラ「まあ、ベッキー、もう……」

ベッキー「（振返る）お早うございます、お嬢さま……あのォ、帽子、このかぶり方でいいんでしょうか」

セーラ「（微笑）ええ……とてもよく似合うわ」

ベッキー「わあ、よかった……私、おかあさんに早くこの夏帽子見せたくて……」

セーラ「それで朝早く眼がさめてしまったのね」

ベッキー「えッ お嬢さま、ご存知でしたか」

微笑で頷くセーラ、促す。

セーラ「さ、下へ行きましょう」

ベッキー「はい、お嬢様……」

5 同・台所

ベッキー、置いてある例のつづらを提げる——

テーブルで、紅茶とトーストの朝食を食べているモリーとジェームス。
ジェームス「やれやれ、生徒たちがいないと気楽で助かるなあ」
モリー「ほんとだよ。当分骨休めが出来るってもんさね」
そこへ、セーラと、つづらを提げたベッキーが入って来る。
セーラ「お早うございます、ジェームスさん、モリーさん」
ベッキー「お早うございます」
モリー「おや、ベッキー……もう出て行く気かい？」
ベッキー「は、はい……夕方までには、家へ着きたいと思って……」
モリー「そおかい……フン、生徒さんたちのシーツ位、洗わせてからと思ったのに」
セーラ「洗濯は、私がしますから……」
モリー「当り前だよ」
ベッキー「す、すみません、お嬢さま」

セーラ「いいのよ、ベッキー」

ふとモリーに向き直ると、

セーラ「あの、ベッキーになにか食べてから行くようにお願い出来ないでしょうか」

ジェームス「冗談云うな……里帰りにそこまで面倒見られるか」

モリー「そうだよ。食べたきゃ、自分のお金でどこかで食べるんだね」

顔を見合せるセーラとベッキー。

ベッキー「大丈夫です、お嬢様……私、おなかのすく位、馴れてますから」

セーラ「ベッキー……」

その時、探しながら入って来るアメリア。

アメリア「あ、ベッキー、ここにいたのね……院長先生がお呼びよ、来て頂戴」

ベッキー「は、はい、アメリア先生……」

ベッキー、つづらを置くと、アメリアに続いて出て行く。

ジェームス「やれやれ、院長先生も院長先生だぜ……そりゃ、メイドを里帰りさせりゃ、その分食費が浮くだろうが、こっちは仕事が余計に増えるだけだ」

モリー「全くだよ……さあさあ、ベッキーがいない間、院長先生の食事のお世話は、お前の役だからね」

セーラ「はい、モリーさん……」

6

同・院長室

ミンチンとアメリアの前に、脅えて立つベッキー。

ミンチン「いいですね、新学期が始まる前には、また沢山の準備をしておかねばなりません。休暇が終ったら、真っ直ぐにここに戻って来るように……」

ベッキー「は、はい、院長先生……」

ミンチン「アメリア……今日までの給料を支払っておやり」

アメリア「はい、お姉様……」

アメリア、用意してある手提金庫から、幾つかのコインを取り出すとベッキーに渡す（一シリング貨プラス八ペンス分の貨弊。計二十ペンス以下程度）

アメリア「はい、落したりしないようにね」

ベッキー「有難うございます、アメリア先生……（はっとなり）あ、それから、有難うございます、院長先生！（最敬礼）」

ミンチン「よろしい……」

その時、ノックの音――

ミンチン「お入り……」

ドアが開き、紅茶のポットとトーストの盆を捧げたセーラが入って来る。

セーラ「あの、お食事はこちらでと聞きましたので」

アメリア「あ、有難う……（受取り）今日から一人で大変ね」

セーラ「いいえ、大丈夫です……それより、院長先生に、お願いがあ

るんです」

ミンチン「（ジロリ）なんです、いきなり」

セーラ「あの、駅までベッキーを送ってあげてもいいでしょうか」

ミンチン、アメリアと顔を見合せる。

アメリア「お姉様、私、丁度手紙を出しに行って欲しいと思ってましたの。ついでに、よろしいですわね」

ミンチン「ま、よろしいでしょう……早く戻って来るのですよ」

セーラ「はい、院長先生……」

ほっとなるセーラとベッキーに、アメリア、微笑——

7
同・表

使用人階段を——手紙を持ったセーラと、夏帽子をかぶり、つづらを提げたベッキーが上って来る——

8 道

セーラとベッキーが来る――

ベッキー「あのォ、お嬢様……」
セーラ「え……」
ベッキー「私、久し振りに、故郷（くに）へ帰って、お母さんや、弟や、妹たちと逢えるのは嬉しいんですけど……ほんとは、ちょっぴり胸ん中が苦しいんです」
セーラ「まあ、どうして？」
ベッキー「だって、私は、親きょうだいの所へ帰れますけど、お嬢様は、お父様さえおなくしになって……」
セーラ「ベッキー……」
ベッキー「お許し下さいまし、こんな事を申して……でもお帰りになる所もないお嬢様が、お気の毒すぎて……」
セーラ「いいのよ、ベッキー。私のことは心配しないで……あの学院

にいて、ちゃんとあなたの分も働いておくわ」

ベッキー「でも……」

セーラ「それより、弟さんや妹さんたちに、お土産を買わなくてはいけないんでしょ」

ベッキー「あ、忘れてました、お嬢様……」

セーラ「まあ、ベッキーったら」

明るく笑う二人――

9 お菓子屋の表

近づくセーラとベッキー、ウインドを覗く――

美しい色とりどりのキャンディ――

ベッキー「お嬢様……私、このお店の前を通るたびに、いつか弟や妹たちに買って帰ってやりたいって、そう思ってたんです」

セーラ「そお、弟さんたち、きっと喜ぶわ……でも、どのキャンディ

にするの？」
ベッキー「（微笑）それはもう前から決めてあるんです」
セーラ「まあ……」

10

同・店内

入って来るベッキーとセーラ――
ベッキー「あのォ……あそこに並んでいる赤いキャンディを頂きたいんですけど」
主人「ああ、アップル・キャンディだね……目方売りで一ポンドが……」
ベッキー「いえ、そんなに沢山いらないんです」
主人「沢山いらないって……じゃ、半ポンド位計るかね」
ベッキー「いえ……ほんの、一ペニイ分でいいんですけど」
主人「あん？……なんだ、御主人のお使いじゃなかったのかね」

ベッキー「す、すみません」

主　人「はっはっは、自分が食べるならそう云ってくれりゃよかったんだよ」

笑いながら、キャンディを五、六個とり出すと、紙に包んでくれる。

主　人「ほれ、一ペニー分で、おまけだよ」

ベッキー、財布から大切そうにコインをひとつ取り出す

――

11 同・表

出て来るセーラと嬉しそうなベッキー。

ベッキー「ウフ、私、自分の買物したなんて、ロンドンへ来て、はじめてです」

セーラ「よかったわね……さ、駅へ急がなくては……」

その時、背後から、荷馬車が通り過ぎる。

乗っていたピーターが、驚いて荷馬車を停める——

セーラ「あ、ピーターよ……！」

ピーター「どぉォ……！」

駆け寄るセーラとベッキー。

セーラ「お早よう、ピーター」

ピーター「どうしたんです、お嬢さんに、ベッキー」

セーラ「ベッキーが、里帰りで駅まで行く所なの」

ピーター「へえ……よしきた、丁度。駅まで野菜の荷を受けに行く所なんです。荷馬車でよかったら、乗って下さい」

ベッキー「わあ、よかった！」

セーラ「有難う。ピーターの馬車に乗るなんて、久し振りね」

セーラとベッキー、荷馬車の荷台に腰掛ける。

ピーター、ひと鞭あてると走り出す

12　ターミナル駅・表

（キングス・クロス駅＝グレートノーザン鉄道（GNR）
セント・パンクラス駅＝ミッドランド鉄道（MR)）

いずれもヨーク方面へ

——雑踏の中を、その荷馬車が到着する。

13　同・駅構内

人々の群がるプラットホームに、列車が停っている——

×　　×　　×

残踏を分けて来るつづらを抱えたピーターと、セーラ、

傘を抱えたベッキー

ピーター「さあ、三等車はここだよ」

ベッキー「有難う、ピーター……」

ベッキー、改めてセーラに向直る。

ベッキー「お嬢様……それじゃ、心残りでございますけど……」

セーラ「いいのよ、ベッキー……さ、乗らないと席がなくなるわ」

ベッキー「は、はい、お嬢様……」

ピーター「よしきた……」

ベッキーのつづらを抱えて、タラップに乗込む——続いて乗るベッキー。

14

同・三等客室の中

通路を来たピーターが、空席を見つけ、つつらを置く——続くベッキーに、

ピーター「さ、ここでどうだい……」

ベッキー「有難う……」

15 同・ホーム

その窓外に寄るセーラ――
セーラ「じゃ、ベッキー……元気でね」
ベッキー「は、はい、お嬢様……お嬢様こそ無理をなさらないように……（泣声）」
セーラ「有難う、ベッキー……」

×　×　×　×

その時――機関車が汽笛を鳴らす。

×　×　×　×

セーラ「ピーター、降りないと一緒に乗せて行かれてしまうわ」
ピーター「おっと、判りました、お嬢様……」

×　×　×

――音もなく動き出す列車

×　×　×

ピーターがタラップから飛び降りて来る。

ベッキー「では、お嬢様……」

セーラ「気をつけてね、ベッキー」

ピーター「元気でな……」

×　×　×

ベッキー「お嬢様……！」

身を乗り出して手を振るベッキー――その眼に涙が溢れている。

×　×　×

手を振って見送るセーラとピーター。

列車の後尾が次第に遠去って行く――

ふっと吐息して手をおろすセーラ。

セーラ「楽しいでしょうね、田舎って……」

ピーター「ええ……残念ながら、こっちは、生れたこのロンドンより他に行く所はありませんけどね」

セーラ「私もよ……私にも、行く所はないのよ……」

ピーター「お、お嬢さま……！」

じっと列車を見送って動かないセーラ──

（中　C　M）

16 ミンチン女学院・地下の作業場

山に積んだシーツ――
その傍で、セーラが懸命に洗濯を続けている。
ひょいとモリーが入って来る――
モリー「さあさあ、シーツの洗濯が終ったら、生徒さんたちの部屋の大掃除にかかってもらうからね」
セーラ「はい、モリーさん……」

17 同・裏庭

ロープを張った物干場に、シーツを干すセーラ――
ふと、汽笛の音が聞える――
×　　×　　×
遠くの高架の上を―― 貨物列車が通って行くのが見え

る。

× × ×

後れ毛をあげ、ふっと遠い列車を見やるセーラ、呟く――

――

セーラ「ベッキーは、もうどこまで行ったかしら……」

18 走る蒸気機関車

ボウッと、汽笛を鳴らして――

19 平 原

なだらかに拡がる丘や、草地――
点々と群れを作る牧牛や、牧羊――
――そののどかな遠景の中を、蒸気機関車と列車が走

って行く。

20 走る列車の三等客室

農民や労務者風の男客三人に囲まれて、小さくなって坐っているベッキー。

前の一人は居眠りし、その隣りの男は、取り出した分厚いハムサンドをムシャムシャやりはじめている。

ベッキー、空腹にごくりと唾を呑む。

ふと、気づいて、ポケットから、キャンディの紙包みを取り出すと開き、赤いキャンディをひとつつまむ。

そっと口へ運ぼうとした時、

声「おねえちゃあん……！」

ベッキー、はっと声の方を見る。

離れた席で、遊んでいる幼い男の子と女の子の姿——

ベッキー、口へ運ぼうとしたキャンディを、そっと紙包みに戻し、ポケットに仕舞う——

前の男、怪訝にベッキーを見つめていたが、またパンをムシャムシャはじめる。

ベッキー、窓外に眼を移し、空腹を我慢する——

21 走る列車

丘陵に—— ホワイト・ホース（絵はがき参照）が遠望される。

22 ミンチン女子学院・二階の廊下

——眠っているシーザー。

階段を、掃除道具を手にしたセーラが上って来る。

眼を醒したシーザー、むっくりと起上るとセーラの足許にすり寄り、啼く――

セーラ、しゃがむとシーザーに話しかける。

セーラ「シーザー……夏休みで、ロッティたちは、お家へ帰ってしまったのよ……それから、ベッキーまでも……だから、淋しいでしょうけど、我慢しましょうね」

シーザー、甘えて啼く――

23

走る列車の三等客室

いつの間にかコックリコックリ居眠りをはじめているベッキー。

汽笛の音と共に、ガクンと減速する――

次々に立上り、荷物を取りはじめる三人の客たち――

ベッキー、気づかずに、居眠りを続けている。

24

ある小駅

「ASHFIELD」の標識が読める——

×　　×　　×

減速して入って来る蒸気機関車と列車。

25

その三等客室

眠っているベッキー——列車の停る衝動で、コクンとのめり、はっと眼を醒す。

囲りの三人の客はいない。

慌てて窓外を見て、愕然となる。

ベッキー「い、いけない！」

急いで、つづらをとると席を立ち、通路へ走る——

ベッキー「こ、ここで降りまあす！」

26 同・ホーム

汽笛が鳴り、列車がゆっくりと動き出す。
降り立ったベッキー、ほっと息をつくと、置いたつづらを持ち、前を行く客たちに続く――

27 丘陵の坂道（夕景）

つづらを手に、大汗で登って来るベッキー、立停り、夏帽子で息を入れる。

× × ×

見おろす谷間に、降りた小さな駅が見える――
――遠い汽笛の音。
――丘陵の彼方に、乗って来た蒸気機関車が煙を吐いて小さく走って行く。

× × ×

ベッキー、汗を拭うと、またつづらを手に、坂道を登りはじめる——

28 丘の頂上附近（夕景）

——風が唸る。

突風に飛ばされないよう夏帽子を押えながら登って来るベッキー。

拡がる荒野に—— ポッンと小さなワラブキ屋根の一軒家。

ほっと喜色が浮ぶベッキー、夏帽子を振ると叫ぶ。

ベッキー「テディ！……マアサ！」

29 ベッキーの家・表（夕景）

庭先で、マキを割っていたベッキーの弟テディ(7)と、束ねていた妹マアサ(5)が、その声にはっと振返る——
丘の道に、夏帽子を振っているベッキーの姿——

テディ「ね、ねえちゃんだ！」
マアサ「おねえちゃん……！」

マキを抛り出しざま丘の道へ走り出る。

テディ「ねえちゃん！」

続いて追うテディ——
入口から、乳呑児を抱いたベッキーの母親が出て来ると、遠い娘の姿に気づく。

母　親「べ、ベッキー……！」

30
荒野の道（夕景）

つづらを手に、小走りに駆け降りて来るベッキー、つづ

らを置くと大手を拡げて待つ——

駆けつけて来るテディとマアサ——

テディ「ねえちゃん！」

マアサ「おねえちゃん！」

マアサ、ベッキーの手の中に飛び込む。

ベッキー「マアサ！　テディ……みんな元気だった？」

テディ「うん、元気さ……だけど、ねえちゃん、ロンドン行って、別ぴんになったねえ」

ベッキー「ほんと？」

マアサ「ほんとよ！」

ベッキー「ようし、あんたたちに、お土産買って来たからね」

紙包みを出すと開く——

テディ「うわあ、キャンディだ」

マアサ「おいしそう！」

ベッキー「さ、食べてごらん」

マアサ、そっと一粒とると口に入れる。

マアサ「わあ……あまくて、おいしい！」

テディも一粒とると口に入れる。

テディ「ひゃあ……おいら、こんなおいしいキャンディ食べたのはじめてだ……ねえちゃん、荷物運ぶよ」

マアサ「私、傘持つ」

二人、急いでつづらと傘を運び出す。笑って続くベッキー――

31 ベッキーの家・表

荷物を手に駆け込んで来るテディ、マアサとベッキー。

ベッキー「ただいま……！」

乳呑児を抱いて迎える母親――

母親「ベッキー……よくまあお休みが頂けたねえ。さ、お入り」

32 同・中（夕景）

土間と台所だけの粗末な造り――

ベッキーと母親、テディ、マアサたちが入って来る

母　親「それで、夏休み中ずっとこっちにいられるのかい？」

ベッキー「駄目なの、それが……生徒さんたちの新学期が始まる前に帰るようにって、院長先生に云われてるの」

母　親「まあ……」

ベッキー「それに、早く帰らなきゃ、セーラお嬢様にご迷惑がかかるもの」

母　親「そお……」

ベッキー「それから、これ……」

ベッキー、財布を出すとテーブルに逆さにする――ザッと転り出る大小のコイン。

ベッキー「汽車賃で、随分なくなっちゃったけど、使って」

母　親「悪いねえ……毎月仕送りして貰ってる上に、こんなに沢山……助かるよ」
ベッキー「父さんは?」
母　親「相変らず地主さんの畑へ働きに行ってるよ……昨年、私が病気した時の借金もまだ残ってるでねえ」
ベッキー「そう……」
　　ベッキー、急に明るく振舞う——
ベッキー「ね、今夜は、私が夕食作るね」
母　親「まあ……お前だって疲れてるのに……」
ベッキー「大丈夫よ……台所の仕事なら、もう馴れてるもの」
　　ベッキー、台所へ行くと、キビキビと働きはじめる。
　　顔を見合せる母親とテディたち——
母　親「嬉しいよ……お前がそんなに立派になってくれたなんて……有難うよ、ベッキー」
　　そっと涙を押える——

33

丘の夕景

暮れなずむ畑の彼方に——小さな教会の鐘塔が見える。
——晩鐘が、聞えて来る。

34

ベッキーの家の中（夜）

粗末な夕食のテーブルを囲んで——それぞれに手を合わせているベッキー、テディ、マアサ、母親と、朴訥な小作人の父親の姿がある。

35

ミンチン女学院・台所（夜）

テーブルで、夕食を終えたジェームスとモリー——
ジェームス、大あくびする——

ジェームス「ああ、今夜から、久し振りに早寝が出来るってもんだぜ」
モリー「そうは行かないよ。また院長先生の夜食作りがあるからね」
そこへ、セーラが、食事の盆を下げて入って来る。
モリー「おや、終ったのかい、院長先生の夕食……」
セーラ「はい、モリーさん……夜食も、今夜はいらないそうです」
ジェームス「有難え……ようし、あとの洗い物は、きちんと片附けとけよ」
セーラ「はい、ジェームスさん」
ジェームスとモリー、出て行く――
取り残されたセーラ、吐息でジェームスたちの食器を盆に加え、洗い場へ向う。

36 同・地下の洗い場（夜）

37 同・台所（夜）

独り懸命に皿や食器を洗うセーラ——

洗った皿や食器を棚に納めるセーラ。
見廻して万事を改めると、灯りを消す。

38 同・三階の階段（夜）

ローソクの燭台を手に上って来るセーラ。

39 同・屋根裏部屋（夜）

入って来るセーラ、燭台を置くと、エミリーを抱き上げる。

セーラ「エミリー……今夜からこの屋根裏部屋は、本当にあなたと二人切りになってしまったのよ……お隣りのベッキーはお里帰りしたし、ロッティやアーメンガードも、暫くこの部屋を訪ねてくれる事はないのよ……淋しいけど、我慢しましょうね」

その時、啼き声が聞えて、壁穴からメル達が出て来ると一斉に後足で立ち、抗議するように訴える――

セーラ「(微笑)まあ、あなたたちがいる事を忘れてるって、怒っているのね……有難う、メル……」

セーラ、残してあったパンくずをとるとメル達に与えてやる。

セーラのN「帰る故郷も、温かく迎えてくれる肉親もない私……そんな私をなぐさめてくれたのは、メルの家族だったのです……」

(第二十九話　終)